四、寄木神社

　寄木神社のある東品川一丁目辺りは、昔目黒川が海に注ぐ所にできた洲で、古くは「兜島」と呼ばれていました。

寄木神社の由来については、次のような話が伝えられています。

今から九百三十年程前の康平五年（一〇六二）に源義家が、奥州（秋田県の大部分と山形県を除く東北地方）で勢力をもち、中央政権に従わなかった安倍貞任、宗任の兄弟を討ちに向かう途中で、この神社に立ち寄り、近くにいた漁師に、神社のいわれについてたずねると、

「この神社は、日本武尊と弟橘姫命が祀られています。日本武尊が東国地方を治めるために、三浦半島から対岸の房総半島へ渡ろうと海上へ出たところ、激しい雨風に襲われました。この時、妃の弟橘姫命は、海神の怒りをしずめ、船の転ぷくを救うため、荒れ狂う海にその身を投げました。やがて、海は静まり、暴風雨で砕けた多くの船の破片が、各地に流れ着き、品川浦には、弟橘姫命の衣の一部が流れ着き、これを祀ったのがこの寄木神社です。」と、

答えたので、この話しをきいた源義家は、

「日本武尊が、東国を治めたのにあやかり、これからの奥州の戦いも、必ず成功するに違いない。」と、

改めて神社にお参りして、勝利を祈ったそうです。

やがて、源義家は、奥州の戦いを終えて都に帰る途中で、再び寄木神社に立ち寄り、感謝の気持ちをこめて、兜を奉納し、それ以来、この辺りを兜島と呼ぶようになったそうです。

兜島は、その後、猟師町と呼ばれるようになりますが、その名の由来について「新編武蔵風土記起稿」では、

「この辺りは、昔は洲だった所で兜島といい、人は住んでいませんでした。明暦元年（一六五五）に、朝鮮半島からの使いが、江戸幕府を訪れた時に、南品川宿に住んでいた漁師たちは、荷物の運搬や宿の提供を断ったため、幕府から今まで住んでいた南品川宿の地に住むことが許されず、この兜島に移されたのです。このことから、この辺りを猟師町（この時代は「猟師」と書き記していた。）と呼ぶようになりました。」と記されています。漁師たちが移り住んだ時に、寄木神社も南品川宿から現在の場所に移ってきたそうです。

寄木神社

撮影日：2008年(平成20年)12月15日

（「しながわweb写真館」より）

